

今年度も、まもなく終わろうとしています。1年間、お読み頂きましてありがとうございました。

さて、今日と明日の2日間、年長組は スペシャル☆デイとして、卒園プログラムを 行ないます。卒園式までの カウントダウン・カレンダーの日にちを1日1日 数えながら、ひと時ひと時を 大切に今を惜しんでいる子ども達が、大好きな仲間と共に思い出を刻み合おうと選択した 最後のイベントは、自分達が小さい頃から慣れ親しんだ この保育園で すーっと過ごすことの出来る『お泊り会』でした。

もともと、この卒園プログラムというものは、保護者の方々が主催の“謝恩会（茶話会）”でした。卒園式を終了し、お別れのお見送りをして 一度 園舎を出られた園児達や 保護者の方が 再び 戻られ今度は 私たち職員のために ホールを謝恩会用に設定し、心づくしのおもてなしをしてくださる時を過ごさせて頂いていました。その会の開催費用は、1年間の 皆さまからの 積立金によるものでした。けれど私は、この“謝恩会”というものの在り方、“卒園”ということについて、園長を引き継いだ際、改めて考え直してみました。何より大切にしたいことは、すべてのことについて 常に子どもの立場や目線で取り組む 子ども主体の保育 です。それを第一に掲げた時、「卒園の日は 卒園式のみ行いたい」と思いました。巣立って行く子ども達と 保護者の皆さまへ これまでの感謝とお祝いの想いとともに、心をこめて お見送りする時にしたいので、私達に対する『謝恩会』の開催や、そのための積立金は廃止させて頂きたいとお願いしました。そして、主役である子ども達のために、ひとりひとりの心へ贈り物となるような 卒園プログラムを 保育の中で行いたい、また、積立金については、子ども達のプログラムのために 卒園の思い出として心に残るような有意義な使い方を考えたいと提案しました。このような経緯から始まった卒園プログラムの、第1 回目の年は 子ども達と担任との熱い希望により『お別れパーティー』の開催でした。子ども達が「今まで自分達を育ててくれた お父さんやお母さん お家の方達を招待して、ありがとう！を言いたい」と 家族には内緒で話し合い、プランを練りました。司会進行も お料理も 飾り付けから買出しまで すべて子ども達が行い、アトラクションや歌、ゲーム それまでの日々、仲間達と一緒に経験した様々な思い出を振り返りながら お家の方や先生達も一緒にたくさんのサプライズに沸き、皆の笑顔と笑い声が溢れる素敵なプログラムが実現できた一日でした。翌年は 半分の人数、クラスのカラー的に 前年度とは正反対の子ども達でした。自分達が企画したり進行したりすることには消極的と判断した担任と私は、この子達にふさわしい思い出づくりは何かを考え悩みました。そして“卒園・就学するとは 大きな社会への船出でもある”と社会への初めの一歩として、保育園から外に出てみよう と 子ども達と保育者だけで1日かけてのバス旅行に決定しました。けれども、ただワイワイとバスに乗って出かけることが目的ではなく、社会への第一歩の経験として子ども達を 子ども扱いするのではなく、一人の人として尊重してもらえる場所を捜しました。それが“三鷹の森ジブリ美術館”“劇団四季の自由劇場”や、今は無くなってしまいましたが“こどもの城”“東京タワーのレストラン”でした。このように、毎年の卒園プログラムは、担任が子ども達の声に耳を傾け、様子を見守り、子ども達と話し合い 職員同士も幾度となく相談しながら その時その時にあったことを選び 企画し 行ってきました。ある年は 雪が降り積もる中での お泊り会もありました。「でーっかい バケツ・プリンを 皆で作って食べてみたい！」という 子ども達の願いが 叶えられてその出来上がりに皆で驚き、心ゆくまでお腹いっぱいになり 大喜びしていました。この時の卒園生は高校生になった今でも 遊びに来る度に、保育園の中の1 番の思い出として嬉しそうに話してくれます。そして 今年のいるか組は『もう一度 保育園に皆で泊まりたい！』でした。やりたいこともたくさん！でも何よりも全員が望んだことは、“クリスマスに15名で出来なかったページェント！”でした。

「卒園する前に、いるか組の全員で どうしてもやりたかった！」という、この子ども達の言葉を聞き 一人一人の想いの深さ、祈りにも似た願いを知り、皆にとって ページェントという存在は こんなにも大きく、その経験を通して育み合った仲間への愛は、それぞれの輝く宝物であり、お互いの心を結び 貴い絆であり力となっていることを思わされました。今年の卒園プログラムも 今年のいるか組らしく 温かく明るく元気に、思う存分 心満たされる 思い出の時を重ねることができるよう 神様の祝福とお守りを心から祈りつつ、私自身も、一人一人との出会いを振り返り、感謝をこめてひと時ひと時を大切に噛みしめながら 思いきり楽しめたいと思います。皆様の温かな御理解とご協力を感じ感謝致します。

「ふたりでも三人でも、私の名において集まる所には、私もその中にいる（マタイ 18:20）」（石田 記）